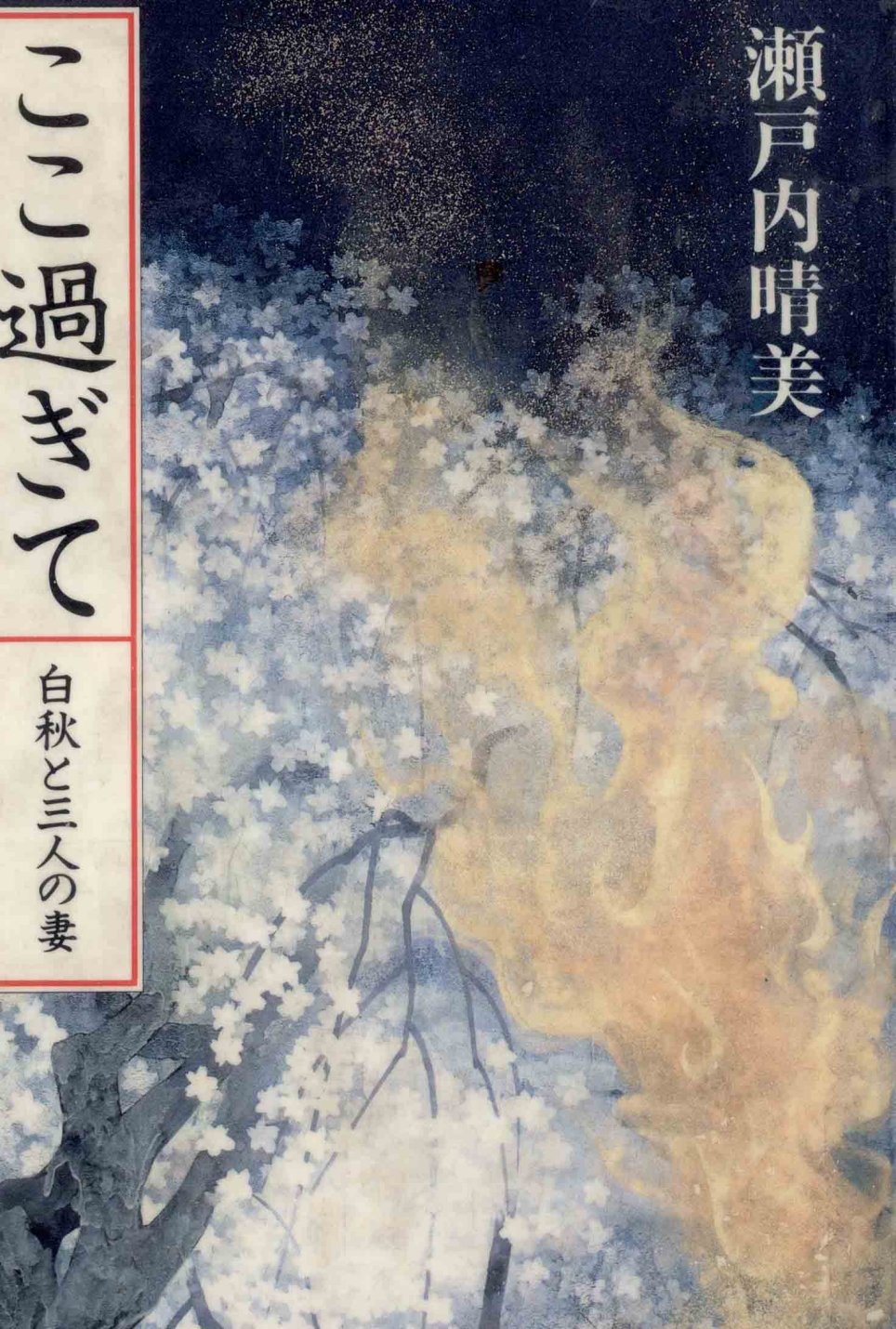


瀬戸内晴美

ここ過ぎて

白秋と三人の妻



瀬戸内晴美

ここ過ぎて

——白秋と三人の妻

新潮社版

ここ過ぎて「白秋と三人の妻」

印刷 昭和五十九年四月二十五日
発行 昭和五十九年四月三十日

著者 瀬戸内晴美

発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
業務部〇三(二六六)五一二
電話 編集部〇三(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八

印刷所 株式会社金羊社
製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛送付下さい。
送料小社負担にてお取替いたします。

© Harumi Setouchi, Printed in Japan, 1984.

定価 一六〇〇円

ISBN4-10-311208-5 C0093

ここ過ぎて
―白秋と三人の妻―

装画
松尾敏男

一章

ひとりの巡礼の後姿が見えてくる。

小柄な肩が薄く細く、笈摺かきずりのかわりに斜めに背負った白木綿の風呂敷包みも痛々しいほど、骨細なきやしゃな背姿。

行手の東山の稜線から昇ったばかりの陽光が、重い冬の朝霧を追い、見るからに真新しい巡礼の白衣や脚絆や手甲を、清々しく浮きたたせている。頭にいただいた菅笠も白く、

迷故三界城 悟故十方空

本来無東西 何処有南北

の偈に、同行二人と書き添えた墨痕も鮮やかで、まだ濡れているように瑞々しい。

京都の冬の朝は、物みなが凍てつき、膚は痛いように寒い。七時にまだ少し間のある早朝、東西に延びた北大路の大通りには、他に人影もなく、森閑と静まりかえっている。大徳寺の長い土塀が白々とつくあたり、禅堂の朝の勤行の気配もそこまでは伝えず、ひたすら静寂で森厳な空気が、境内の丈高い樹木の梢を凍らせている。

巡礼は立ち止り、土塀の尽きようとするあたりでふりむき、見送る人でもいるように、山内に向って合掌する。その手をほどくと、馴れない笠の緒を締め直し、ふたたび朝日に向って歩きはじめる。腰につけた鈴が鳴る。

真実、諦^{アキラ}メ、タダヒトリ、

真実一路ノ旅ヲユク。

真実一路ノ旅ナレド、

真実、鈴フリ、思ヒ出ス。

御詠歌ではないことばが、巡礼の笠の中から聞えてくる。細い女の声だ。

二人デ居タレドマダ淋シ、

一人ニナツタラナホ淋シ、

シンジツ二人ハ遺^{ヤル}瀨ナシ、

シンジツ一人ハ堪ヘガタシ。

鈴が鳴り、鈴音が凍る。

巡礼は春立ちが常識とされている。秋巡礼さえ淋しいと、さけられ勝ちなのに、まして選りに選って、厳冬に旅立つ捨身の行に、何が賭けられ、祈りこめられているのか。同行のみ仏の姿は現には捕えられず、ただ孤影悄然とした後姿を見せて女巡礼が独り往く。

昭和六年（一九三二）、一月二十三日、早朝、四十二歳の江口章子^{あやこ}が、京都紫野の名刹大徳寺の

聚光院から出発、西国三十三カ所観音霊場を打つべく、巡礼の旅にふみだしたという事実を知らされた時、私の目には時空を超えてその背姿があり見え、彼女の声が聞えてきた。

たまたま私も観音霊場を巡礼している時でもあったため、彼女の足の痛みや、息の乱れがそのまま生身に伝ってくるような気がした。

江口章子といつても大方の人は彼女について、ほとんど無知に等しい筈である。章子が詩集一卷、詩文集一冊を持つ女流詩人だというより、詩人北原白秋の妻の一人だといった方が通りは早い。

白秋は生涯に三人の妻を持ち、二人と離婚している。俊子、章子、菊子。俊子は隣家の人妻で、白秋は俊子との恋のため、姦通罪に問われ入獄の憂目を見た。白秋の人生の最初の蹉跌であり、生涯の大事件であった。出獄後、白秋は俊子と正式に結婚するが、一年余りで離婚している。めぐりあつてからの歳月を数えても、足かけ四年でしかない縁であつた。章子は、俊子の去つた後の白秋と結婚し、五年の歳月を共有している。俊子と同じく白秋から離縁された。

菊子は章子の去つた白秋の許に嫁ぎ、二十二年の歳月を共に暮し、二児を儲け、内助の実を挙げ、白秋の最期を看とつてゐる。昭和五十八年一月二日、満九十三歳九ヵ月の天寿を全うし逝去された。菊子だけが見合結婚であり、良妻賢母としての名声が高い。そして国民詩人大白秋が受けた世俗的な輝かしい名声のすべてと、幸福な家庭の炉辺の暖かさを共有した。夫人の貞潔と奉仕の報いとしては当然の結果であつた。

白秋をして離縁せずにはいられないほどの苦悩を与えたふたりの妻は、どれほどの悪妻であつたのだろうか。この世のあらゆる出逢ひは卒爾ではない。まして男と女が、愛しあうという形で結ばれるということは、たとい短い歳月にしろ、それなりの縁の約束があつてのことだろう。

俊子は、白秋に、苦しい恋の産物として、『桐の花』一聯の絶唱を遺させている。

章子は、白秋に、『雀の卵』を産ませている。詩人にとつて、詩を産ませる妻が、悪妻であら

う筈はない。悪妻でない面と、悪妻の面の比率のバランスがこわれた時、俊子も章子も白秋から離縁されたのだろう。

二人とも後に二度結婚して、その結婚にも揃って二度とも破れている。悪妻というより、家庭の規格の中に収まりきれない過剰なものを持ちあわせていた女たちだったのではないだろうか。江口章子の存在を私に教えてくれたのは、NHK福岡のディレクターの大神幸男氏であった。私はそれまで白秋の妻というのは、姦通事件で有名な『桐の花』の女性と、菊子未亡人だけだと思っていた。それも、問われてはじめて思いかえしてみた程度で、白秋に何人の妻がいようが、何人の愛人がいようが無関心という心境であった。私はもう何十年も白秋の詩集を手にとったこともなかったのだ。

「とにかく資料を送りますから見て下さい。きっと興味を持ちますよ」

大神氏は雑然と他人の声のいりまじって聞えてくる仕事場からの電話を、手早く切ってしまった。電話が切れてから、私は大神氏の言葉を反芻していた。

「岡本かの子と育ちなんか似ているんだけど、晩年の悲惨さは対照的です。一時にもせよ、白秋の妻だった女としては、あまりに惨めな晩年ですね。情熱過剰でいつでも進路が狂っちゃうんでしょね」

有能な事務家らしいす早さで、大神氏からの小包みが届けられた。その小包みをほどこしながら、私は白秋の詩を思いだそうとしていた。

見るとなく涙ながれぬ。

かの小鳥

在ればまた来て、

茨はらちのなかの紅き実を啄つばみ去るを。

あはれまた、
啄み去るを。

ひとつの詩がすらすらと唇に蘇ると、後は水泡が湧くように、次々に記憶の底から短い詩句が
浮び上ってくる。

柔かきかかる日の光のなかに、
いまひとたび、あはれ、いまひとたび、
ほのかにも洩らしたまひね、
われを恋ふと。

あはれ、人妻、
ふたつなきフランチエスカの物語
かたらふひまもみどり児は声を立てつつ、
かたはらを匍ひもてありく、
君はまた、たださりげなし。
あはれ、人妻。

あかしやの金と赤とがちるぞえな。
かはたれの秋の光にちるぞえな。
片恋の薄著のねるのわがうれひ
曳舟の水のほとりをゆくころを。

やはらかな君が吐息のちるぞえな。
あかしやの金と赤とがちるぞえな。

十二、三歳の少女の頃、頭に刻みつけてしまった詩は、歳月の錆もとどめず、光りながらいくらでもあふれてくる。私が暗誦したのはほとんど『思ひ出』であった。「断章」という詩章には、短い詩にすべて題がない。目次には、詩の最初の行が題の代りに挙げられている。その一行を見ただけで、後の詞がすらすらと出てくるように暗誦していた。白秋の詩は軽やかでやるせなく、少女の感傷を甘酸っぱくくすぐった。

最初に白秋の詩を私に教えたのは、小学校の三年生の担任の若い女教師だった。その頃、そういう教育が流行していたとかで、私は毎日放課後ひとり残されて、教科書以外の文学書を読まされた。たいてい文学少女上りのその教師が選んだ詩や散文詩であった。

薔薇ノ木ニ

薔薇ノ花サク。

ナニゴトノ不思議ナケレド。

一番早く一度で覚えたのがその詩であった。それが『白金之独楽』の中の詩だったのかと知ったのは、女学生になってからだ。女学校に上ってからは、赤いビロードに金押しのアルスから出た白秋全集を、図書館から借りだし熱中した。専ら、『邪宗門』から始った詩集の三冊で、歌集は『桐の花』だけしか見ていない。

ここ過ぎて曲節イロデフの悩みのむれに、
ここ過ぎて官能の愉楽のそのに、
ここ過ぎて神経のにがき魔睡に。

邪宗門の扉銘を紙に書いて机の前の壁に張りつけ、それを見つめていると、不思議な魔の世界の扉が今にもそこから開かれるような切ないときめきが湧いてくるのであった。

酒に酔ったようなあの陶酔が、いつまでつづいたのであっただろうか。女学校の上級の頃には、もう白秋を展くことはなかった。

白秋の死は、東京女子大の寮で知った。一年前の十二月八日の真珠湾空襲のニュースの時ほどの、興奮やショックはなかったのか、今、そのことで何の記憶も残っていない。

大神氏の包みの中からは、数通のパンフレットと、西本秋夫氏の『白秋論資料考』と、原田種夫氏の『さすらいの歌』が出てきた。

パンフレットで、私は江口章子が、故郷の国東半島くにま香々地かがちの、周防灘を見渡す岬の鼻に、立派な歌碑を建ててもらっていることを知った。

西本氏の著書では、俊子と章子に関する資料が、二人の作品や書簡まで含めて愕くべき執念で集められていた。

口絵に、俊子と章子の写真が載せられている。俊子は三枚とも、美しく、額の広い鼻の高いエキゾチックな美貌で、着物の着付など、どこか粹で、女優のように洗練されている。美しいといっただけでなく、ハイカラで智的でコケティッシュでもある。若い白秋が思わず身を誤るほどの魅力は、不鮮明な印刷の写真からさえ充分うかがえる。

それに比して、俊子より一枚多く、四枚の顔が載っている章子の方は、一枚々々が、別人のよううで、本当の章子像というものが捕えられない。一枚は巡礼姿で、四十二歳の筈なのに、まるで

十代の小娘のように見える。その横に黒紋付（あるいは色紋付）の羽織を着て盛装し、頭は丸髻に結びあげているのがある。西本氏の註では大正二、三年というから、章子二十五、六歳の時の筈だが、髪形と野暮ったい着付のせい、十も老けて見える。次頁にある小さな顔写真は、大正十三年とあるから、三十五、六の筈なのに、束髪のせい、若々しく二十代にしか見えない。最後の一枚は、地鎮祭の祝賀パーティの群衆の中にいる章子の写真だが、これはまた派手な留袖に耳かくしという盛装で、化粧のせい、九条武子のように腐たけて見える。

実にこの四枚の写真が、それぞれに別人のようで、同じ章子だといわれてもとまどうくらいである。俊子の如何にも群衆の中でもぬきんでて目立ちそうな個性的な美貌とちがって、章子の方は、平凡な目鼻立に特徴がないせいなのであろうか。それとも、人並外れた運命をたどる人にしてはあまり個性的でない外貌が、案外章子の本質で、章子は意志的でなく、境遇に流されていく情緒的な弱い女なのであろうか。

二人の写真の頁には、それぞれ、筆跡も写されている。二人揃って、それは見事な達筆で才媛ぶりが伺えるもので、甲乙はつけ難い。更に、家の写真が加えられている。俊子の方は、昭和四、五年、京都山科の一燈園にいたころ住んでいた家とあり、章子の方は、京都山科の同和園（養老院）と説明が入っている。

俊子が一燈園に入っていたとは愕かされる。章子の養老院時代は昭和十七年から二十年だから、同じ山科に住んでも、二人は全くかけちがった年代にそこに住んでいたようだ。

室生犀星の『我が愛する詩人の伝記』の、北原白秋の巻によれば、俊子は、派手好みで、しみじみした家庭のことの出来ない女と描かれている。その俊子が、絶対奉仕の精神に服従して、他人の家の便所掃除を行つとめる一燈園に二年間もいたというのである。

その上、西本氏作の俊子の年譜によれば、白秋歿後、俊子は静岡へ疎開し、釈定光老師の般若道場に通い、禪の修行をしたとある。

「やがて道場内の善長庵に住み込む。定光老師からその賢明を認められ、賢順と号し、定光老師亡きあと、吉祥寺の武蔵野般若道場に苧坂光竜師を訪ねて参禅した」

という。

章子もまた、白秋と別離後、京都大徳寺の芳春院へ入り参禅しており、その縁で大徳寺聚光院の住職中村戒仙に師事して縁が嵩じ、ついに戒仙と結婚するまでになる。

その結婚が幸せで平安なら、結婚届を昭和五年十月に出し、翌年一月二十三日から、单身、冬巡礼に出発するであろうか。

その上、章子は、戒仙との結婚を前に、得度して法名妙章と改めている。

これは、私の全く予期しない出来事であった。白秋の妻の二人とも、別後に仏にすぎるとは偶然だろうか。

更に同書によれば、菊子は白秋と結婚するまで、田中智学の国柱会で、日蓮主義の宗教運動に挺身していて、結婚など考えていなかったのだという。大正八年秋から国柱会にいた菊子は、八月ほどして、九年九月、白秋と見合いし、その段階で国柱会は止め、結婚の準備をしたらしい。田中智学というのは熱烈な日蓮主義者で、国柱新聞を発刊し、「国柱会」を創立して、日蓮主義の布教に全力を尽していた。

菊子もまた仏教の信徒なのだ。あるいは、俊子や章子よりも、最も熱烈な信徒であったかもしれない。

これはどういうことなのだろう。白秋の妻たちの三人のすべてが、宗教的なものに身を傾けていく。白秋自身の中に、そういう彼女たちを感化する宗教的なものが存在していたのか、あるいは白秋の好む女たちが、どこか宗教的なものに関心を持つような資質の女たちであったのだろうか。

白秋の祖父は黒住教の熱心な信者だったという。白秋の初期の作品は南蛮趣味で、切支丹でう

すとか、聖くろ磔はくとか、波羅はら韋い僧そとかの語がしきりに出てくるが、必ずしも宗教を歌っているわけではなく、言葉のかもしだす異国情緒を愉しんでいるにすぎない。

『白金之独楽』あたりに宗教的法悦が歌われているが、それも果して本当の法悦か、言葉の上だけでの情緒的法悦かは、まだわからない。

原田氏の作品は、真正面から江口章子の生涯だけを書ききろうとする態度で臨まれた心のこもった創作である。資料の多くは、西本氏の研究に負うところが多いが、更に、原田氏が御自身歩かれて発見した新しい事柄や、原田氏のファンから次々送られてくる新資料が多く集り、作品の奥行を深くしている。

何より、作者の、章子に対する同情と愛情が熱っぽくそがれていて、章子はこの作品の中で、薄倖数奇な運命ながら、愛すべき純一な魂の女人として描きだされている。

原田氏は最後に章子の放浪の長い足跡を追った果て、悲惨な死の場面にたどりつき、それまで押えていた想いを一挙に吐きだしたような熱っぽい筆つきで、章子の臨終を描ききっている。

章子は、故郷の香々地の生家の酒造家の酒倉の一室で、病みほうけ、狂い死する。

「そうして一年三カ月、江口章子は、極端に言えば糞尿にまみれて、座敷牢のなかで生きた。危険なので、寒くなっても火の気はいらなかった。海沿いの町である。周防灘から吹きつけてくる凍てた風が、香々地の家並みに容赦なく叩きつけた」

そして十二月二十九日の朝、雪の降りしきる中で、章子はひとり息絶えていた。枕元には手垢で黒光りした白秋の『雀百首』が残されていたという。

作者の作家としてのフィクションが加えられているとしても、長い時間、章子の幻を追いつづけた作者ののっぴきならない心情的リアリティが、その悲惨な死しな様を、現実以上の真実として定着させていた。

それを読むと、私は俊子の死様もまた知りたくなった。

章子の得度は方便だったのだろうか。巡礼から帰って以後の、章子の暮しの中で、章子の出離が章子の精神を安らがせているとは見えないし、いつのまにか、章子の髪はのび、有髪の俗人の姿にもどっているようである。『雀首』一冊はあっても、章子の枕元には普門品一冊、修証義ひとつ置かれていた様子はない。

その死様にも恩寵の輝きは認められていない。

そして俊子は。私はまた西本氏の労作の中に首を突っこんでいった。

俊子の最期は相模の伝染病病院で施療患者として息を引きとっている。晩年もずっと肉親とのつきあいはなく、茶の師匠をして細々と暮らしていたらしい。六十六歳という享年は、白秋よりも章子よりも長く生きたけれど、長く生きた分が二人より幸せだったとはいきれない晩年のように思われる。

白秋は菊子と結婚して以来、円かな家庭を営み、存分の仕事をし、詩壇では最高の地位を得、国民詩人とあがめられていた。

昭和十七年二月、持病の腎臓病、糖尿病が急激な悪化を見、慶応病院に入院、翌月、杏雲堂病院へ移り、小康を得て自宅療養になり、十一月を迎える。その間に母シケも脳軟化症で倒れたので、母想いの白秋は自分の病気の養生をするどころでなく、病母の身を案じていた。

二階の書斎に上ることも出来ず、玄關脇の部屋に寝台をいれて、病室兼書斎兼応接室としていた。

五月号『多磨』の雑誌にこうした状態を告げ、

「その中で突然に童謡の感興が一度に湧き起つて、或る晩徹夜して三十篇口述し、続いて三四日は物に憑かれたやうに遂々八十篇を書き下して了つた。これは少国民詩集の『満洲地図』として七月頃までには上梓されるであらう。それに今日からは又、他の仕事に取りかかった為に、室内はパレンバンの油田地帯の如くである」

と意氣軒昂であつた。もちろん、そうした口述は、いつでも身邊を離れない菊子の役目であつた。

十月になると病狀の悪化が目立ち、十一月二日、臨終を迎えた。『多磨』十二月号に載つた白秋の弟子で医者で歌人の米川稔の臨終の記によれば、白秋の枕元には、菊子と子供たち弟妹たちに弟子たちが取り囲んで、どんなかなすかな反応にも一喜一憂して看守つていた。激烈な発作に白秋は度々見舞われ苦しんだ。白秋は呼吸困難とチアノーゼで、強心剤の注射で辛うじて耐えながら、家族に励まされていた。発作が起ると、一人が白秋の頭を吊り上げるように背後から抱え、一人が背中を力まかせに押す。前から一人が洗面器を捧げるといふ状態で、それが幾度も繰りかえされていた。

ある発作の後で、白秋がいった。

「ああ、よかつたねえ、これで落ちついた。……あんなことで死ぬものか。あれで死ねたら、死ぬなんて楽なものだよ」

何か食べたがり、菊子が林檎をしばつて出すと、丸のまま持つて来させ、
「うまい、うまい」

と二片の林檎をたちまち食べてしまった。

息子の隆太郎が窓を少し開けると、白秋は感動のこもった声でいった。

「ああ、蘇つた、隆太郎、今日は何日か。十一月二日か。新生だ、新生だ、この日をお前達よく覚えておき。わたしのかがやさしい記念日だ。新しい出発だ。窓をも少しお開け。……ああ、素晴らしい」

白秋の一挙手一投足、どんな表情の照り翳りも見逃すまいとつめきつてゐる米川稔の聞いたことばだから、おそらく、間違ひなくその通りとみてよいのだろう。

しかし、この一時の狀態は、蠟燭の火が消える前に示す一瞬の輝きのようなまやかしで、それ